千刈狸の呟き

～ 新時代の医療に求められるもの ～

黄 昏 狸

医学・医療に対する最近の社会的ニーズは、疾病の治療だけでなく、人が健康で幸せな一生を送るためにどうするのかという視点を含んでおり、疾病の予防からリハビリテーション、介護までを一貫して考えることが求められている。これからは、患者のクオリティ・オブ・ライフを重視する視点、キュアだけでなくケアを重視する視点が重要であり、さらに医療に加え介護・福祉まで見据えた取り組みが求められている。

超高齢・人口減少社会において、医療体制はまさに変革を求められている。その中で医師の働き方は着実に改革が行われていくと予想され、今やロボットやAI、ICTなど医療テクノロジーによる変革も間違いなく進んでいる。しかし、それらの実用化やタスクシフティング等の推進はいずれも“生産性の向上”を目指す取り組みである。それを考えるとき、本来は人と人とのアナログな関係性の中で行われるケア、というものの本質をどこかで忘れてしまっている。そこで考えたのが由利本荘医師会で始められ、今や秋田県で進められている患者に寄り添い、支えるICTツールナラティブブックという新しい連携ツールである。ひとりの「人」の情報を各職種、各システムがそれぞれ持っていて、それをインフラ整備によって共有するという発想からパラダイムシフトし、その「人」の情報はその「人」個人のものであるから、個人に持たせるという原点にもどったのである。ナラティブブックはこの個人の情報をクラウド上で一元化し、情報は個人が認証した人だけが見る事ができるように開発されている。個人情報を個人が必要な人にのみ認証して開示するという点で、医療カルテやその他の情報共有ツールとは大きくその思想が異なっている。本来その人のものである情報が、病院のカルテの中にあったり、ケアマネジャーのファイルの中にあったり、薬局のお薬手帳の中にあったり、一部のネットワークの中だけにあったり、職種や利用しているシステムによって分散させられていることが、災害時にも問題になったことは記憶に新しいのではないか。情報は、個人に持たせて、その「人」のデータベースに集約し、各職種は個人からの許可を得て、その中から自分の必要な情報を取り出すというのが自然であり、一番よく、それこそがいま求められているイノベーションではないだろうか。

今の医療においては、患者の選択に大きく影響する「想い」や「人生観」に触れることなく、検査・処置・報告的なデータのみが蓄積されていることが多い。介護や福祉の現場も含め、患者の情報は施設や職種毎に分散・偏在している。これは、従事者の負担増大にもつながっている。一般的にカルテなどでは本人不在、処置や処方記録を共有した連携のためのデータ共有が行われている。その記録内容は家族や本人は希望しなければ見ることができない。それをパラダイムシフトし、その人を中心としたデータベースのなかには個人主体で医療や介護情報だけではなく、延命処置の差し控えや臓器移植への考え方、本人の想いや意思、価値観、人生観に加え、生き死に方、さらには家族へ残しておきたいメッセージ等医療以外の情報や生活状況を共有するという本人主体の記録管理にしていくことが必要となる。それは本人や家族が、喜び参加ができるもの、本人の人生や生活に関わることができ、本人の“想い・生活”が見える情報が見えるもの、さらには本人を中心としたACPの環境づくりができるものにつながると思われる。

新時代の医療において、一人ひとりの国民が医療と上手に付き合っていくことが求められる。また、上手に医療にかかる上では、身近なクリニックなどの医師である「かかりつけ医」を持つことが重要である。かかりつけ医の機能には、全人的な医療を行う『医療的機能』、保健・介護・福祉関係者と連携して健康増進を図る『社会的機能』があり、就業形態・診療科を問わず地域医療に従事する医師は両方の役割を担うことが期待されている。そして、これからは患者自身が選択する医療も求められてくるであろう。かかりつけ医を持つだけでなく、日常的な病気は身近な診療所を受診する、時間外でなく時間内に受診する、自分で情報収集をする、自分のデータは自分で持つ（PHR、PLHR）、便利さと安全を考えての医療の選択が必要になると思われる。

【発行所】一般社団法人 由利本荘医師会（毎月１回発行）　【医師会HP】http://honyui.jp/
由利本荘市水林456-4 TEL0184㉒4085